

滋賀文教短期大学の活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.3

豊かな自然に囲まれた滋賀文教短期大学

滋賀文教短期大学は、昭和27年岐阜県郡上八幡町に、県内で初めての私立短期大学「岐阜県濃北短期大学」として開学。その後、昭和50年に滋賀県長浜市の誘致により同市に移転し、名称を「滋賀文教短期大学」と変更し現在に至っている。豊かな自然に囲まれており、国文学科、子ども学科の2学科からなる。生徒数は100人ほどだ。少人数教育なので、生徒と教師の信頼度が高く、アットホームな雰囲気を感じる。



「滋賀文教短期大学」
国文学科 講師 留学生支援室
池田 大輔 氏

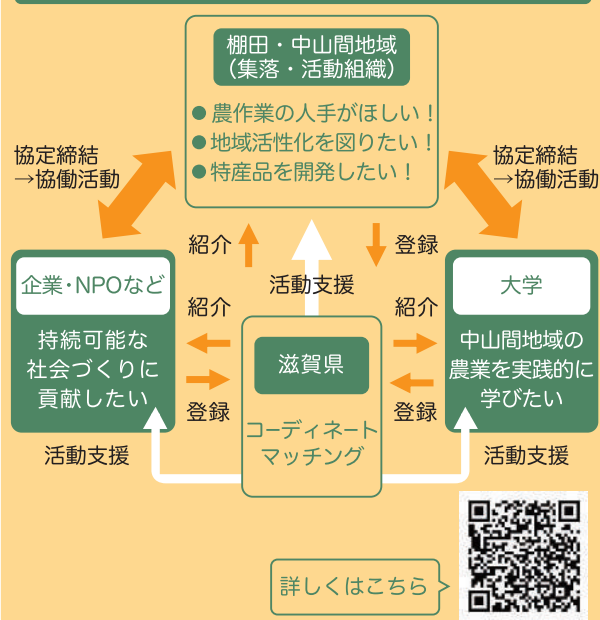
2年という短い大学生活で 社会との繋がりを

学校生活は、2年間。短い期間の中で、専門知識を学び就職活動もしなくてはならない。学生のうちに少しでも社会との繋がりを知って欲しいという思いから、活動できる地域を探していたところ、キャンパスより車で1時間ほどの市内の池原地区と一緒に取り組みをすることになった。今年で2年目の取り組みだ。お話を聞いた池田先生の担当する国文学科の学生は、特に、本を読むのが好き、図書館に行くのが落ち着くという学生が多く、人と接することが苦手な学生が多いそうだ。社会に出る前に、課外活動を通じて知らない世界を知って欲しいという池田先生の願いがあった。

若い世代から池原地区の魅力発信を

「平成30年度にしがのふるさと支え合いプロジェクトに参加し協働活動を開始しました。池原地区に伺う前に、県のサポートもあって、草刈機の使い方や、池原地区の特徴や抱えている問題・課題も教えていただきました。特に草刈機は初めてでしたので、最初は怖がっていた学生もいましたが、どのように扱えばいいのかを事前にしっかりと教えていただきました。実際にやってみると、目に見える結果が得られて夢中になったそうです。また、課題だけではなく池原地区のいいところも実際に歩いてみて感じたり、自然の豊かさには学生みんなが感動していました。また、お昼にいただく蕎麦やご飯が抜群に美味しいですね。」と嬉しそうに語ってくれた。草刈りだけでなく、池原地区の方々には蕎麦打ち体験、意見交流会などをさせていただきました。地域の歴史も教えていただいたり、毎回貴重な体験をさせてもらっています。でも、まだ『お客さん』という印象を受けるので、早く溶け込んでいきたい。今後は、文教短大から池原地区の魅力をアピールできるようにしたいですね。ワクワクしているのがこちらまで伝わってきて、池原地区のこれからの未来が楽しみになった。

しがのふるさと支え合いプロジェクト





いけはら

池原の紹介



一面の蕎麦畑広がる池原地区

紫陽花とダルマ寺として有名な全長寺がある長浜市の池原地区。そこから山側に田んぼと集落が広がっている。40世帯、人口110人と少ない集落ではあるが、その中で小・中学生が12人もいたり、高齢者も田んぼや野菜づくりが趣味という方も多くいたり活気がある印象を受けた。



池原の自然は地域全員で守る

「少子高齢化、荒地が増えていた中で、なんとかせんとあかんというところから池原の自然と環境を守る会を結成しました。」池原の自然と環境を守る会の岩出さん、宮本さん、和田さん、國友さんからお話を聞いた。

平成19年より「多世代が共に築き、共に育む池原の自然と環境」をキャッチフレーズに「池原の自然と環境をまもる会」が発足した。農地が荒れるのは農業者の問題だけではなく、地域で守っていかないといけない。こどもから高齢者まで全ての住民が、自分ごととして捉え、地域を守っていく取り組みを行っている。その取り組みは、空き家改修や棚田ボランティアなど多岐にわたる。活動から11年。現在は、年に1、2回広報誌を出して地域の方に取り組みと地域の魅力を知ってもらっている。



「池原自治会」

自治会長 岩出 昌治 氏

蕎麦から広がる村づくり

景観作物の作付けとして蕎麦を植えていた。空き家を地域資源として活用できないかという雑談の中で、そば道場をしてみてもどうかと面白い意見が出たことがきっかけで、スタートした「池原そば道場」。蕎麦を植え始めた当初は、そば道場を構えるなんて誰も想像していなかった。うだ。今では地域の多世代が交流する取り組み、そして地域外の方が集まる場所、池原地区の活力源として成長した。そば道場は、男性7人女性5人から構成されるメンバーで、蕎麦の生産から蕎麦打ち、そば道場の運営まで一貫して行っている。そば道場は山裾に位置するが、全長寺とも連携し合って年々来訪者も増え集落全体が活気付いてきている。また、それに比例して蕎麦の作付け面積は増え、現在2haにもなっている。そんな池原地区が一番の課題と感じているのは、棚田の草刈り。不在地主の土地についても池原の自然と環境をまもる会で草刈りをしており、年に2回、7月と9月に外部からのボランティアを募っている。この課題に一緒に取り組んでくれる団体を探していたところ『しがのふるさと支え合いプロジェクト』の制度を知り、「滋賀文教短期大学」との連携が始まった。今では、文教短期大学の学生たちが率先して草刈りを手伝ってくれているそうだ。それだけではなく、「初めてやったが達成感があって気持ちいい」「地域の皆さんが暖かい」など嬉しい言葉があるようで、この取り組みに双方ともにやりがいを感じていた。「若い子たちがきてくれることで活力をもらえる。学生さんから色々提案いただいたので、これから少しでも実現できるといいなあ。草刈りしてくれた土地を今後一緒に活かしていきたい。」と期待を語ってくれた。



お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号
TEL: 077-528-3963

詳しくは
こちら



社会福祉法人 パレット・ミルの活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.2

観音寺地区の入り口に位置する「社会福祉法人パレット・ミル」。眺望の良い土地に建った本館・別館からなる施設には人々が集まり、入り口にふさわしい賑わいを感じられる。この施設はハンディを持つ人が自立を目指して働く場として、平成8年にオープン。最初は栗東市森林組合観音寺に位置する木の工所だけで小さくスタートしたが、今では約80名が利用する大きな社会福祉法人として成長した。

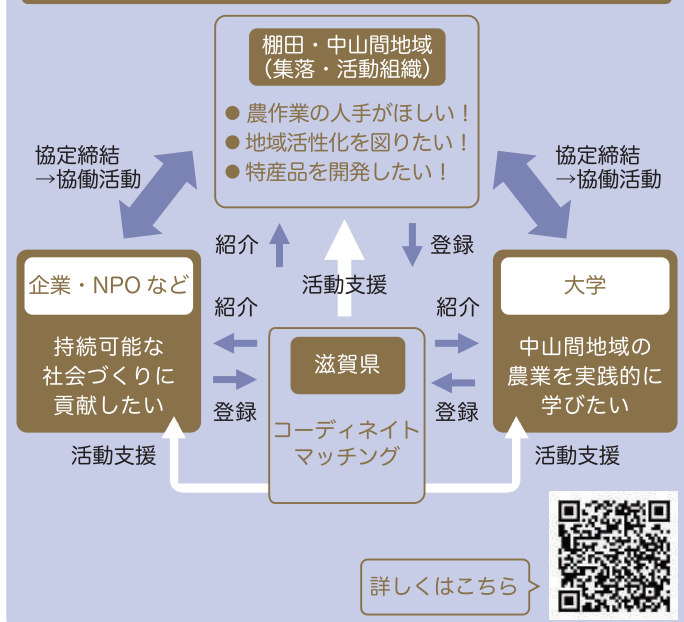


「社会福祉法人パレット・ミル」
所長 中山 みち代 氏

自立できる人へと成長していく利用者

障害者が働く福祉的就労施設は滋賀県内に約200あるが、その月給は設立当初は1万円弱。それでは自立していきたくても難しい。「それならば、最低賃金保証を目指した施設、そしてハンディを持った人が仕事を選べる施設、利用者の自立の手伝いと思って始めたんです。」と語るのは、パレット・ミルを立ち上げた中山さん。パレット・ミルの「パレット」は、木製パレットのリユース作業からスタートしたことに由来するが、絵を描く「パレット」にもかけているのだとか。利用者がそれぞれの色（個性）を持ち寄り、さらに大きな夢を描いていける場所でありたいという理念がある。利用者はそれに応える形で、清掃作業や食品加工、農作業等、様々な作業をしている。「利用者が増え、仕事が増えて施設を増設していくんですけど、建物が追いついていないんです。」と苦笑いを浮かべ、前向きな悩みを話してくれた。理念が施設を大きくした理由であることに違いないだろう。

しがのふるさと支え合いプロジェクト



農作業は初心者だからこそ手を取り合って
初めての農作業はブルーベリー。設立された1年後から中山さんの友人の薦めで栽培し始め、道の駅等で販売している。それに加えて、平成29年からは稲作やニンニク、高麗人参の栽培をし、本格的に農業をスタートさせた。集落の方が耕作するには人手不足で困っていると相談があり、一緒にスタートすることになったのだ。また平成30年には「しがのふるさと支え合いプロジェクト」に参加し、農作業に必要な資機材を設備した。「農業は初心者なので、集落の方に教えてもらって作業しているんです。設立当初からあたたかく見守ってくれ、私たちが受け入れてくれていた集落のみなさんへ少しでも恩返しをしたいですね。」と語ってくれた。



かんのんじ

観音寺の紹介



栗東市の最南端に位置する観音寺地区は、市内で唯一琵琶湖を望めることができる歴史ある町。晴れた日には比叡山も見える。「観音寺」の地名は、この地に
ある寺院「観音寺」に由来する。道に沿って扇形に建てられた街並みには「上の坊^{かみのぼう}」や「下の坊^{しもものぼう}」などの屋号があり、街道沿いには水路が残っていることから、かつては宿坊として栄えた町だったことが推測される。地域に古くから伝わる、旧暦2月1日に行う「おこない」という神事は、集落への疫病や邪気を追い払い退散を祈願している。文化を大事にし、自然と調和して歩んできた観音寺地区は、「天水の里」としてまちづくりを進めている。

天水の里 観音寺地区



「観音寺自治会」
自治会長 三浦 喜彦 氏

集落は大きな家族

人口は60人から70人ほどの小さい集落で、さぞかし運営が大変なのだろうと思っていたが、意外な答えが返ってきた。「14戸と少ない数の集落だからこそ、それぞれの苦労がわかる。なにをするにもみんなが協力的で、やりやすい。みんな黙っていても勝手に動いてくれる。だから自治会長もそんなに苦じゃない。」そう笑顔で語ってくれたのは、自治会長の三浦喜彦さん。自治会長は今年で3年目だそう。少ない人数で自治会や神事などを運営できるよう、時代に合わせて行事も少しずつ変えている。

14戸の中で「役」を回しているの、それぞれが毎年なにかしらの「役」に当たっており、お互いの大変さを知っているの、助け合えるのだとか。何か新しい意見が出たときも、うまくまとまるそう。その団結力は、お話を聞くだけで深い絆であることがわかった。最近、移住されてこられた人もいるそうだが、自治会活動にも参加してもらい、「役」もされているそう。移住してすぐの人に「役が当たることは珍しい集落であるし、それだけ受け入れる心が広いのだろう。観音寺地区はまさしく大きな家族なのである。」

毎月1回の天水会

周囲が山に囲まれており、豊かな土地だからできる作物はとても美味しい。一方、担い手が不足していたことから、集落の入り口に位置する社会福祉法人パレット・ミルさんと一緒に農業をすることになった。平成29年から、8反の田んぼをやってもらっている。まだ2年目から模索中やけど、高麗人参やニンニクもつくっている。H30年にはしがのふるさと支え合いプロジェクトに参加し、農作物に必要な資機材を設備してもらい大変助かっている。」と三浦栄一さんは語る。まだまだ農作業は初心者であるパレット・ミルさんと毎月一回、会合も交えながら密に交流をとり、作業内容を確認し合っている。その名は天水会。「まだ始まったばかりだが、観音寺の農作業と一緒に進めていくことで、農地や集落を守っていきけるようにしたい。未来に期待したい。」と語ってくれた。



「観音寺自治会」
三浦 栄一 氏



お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号
TEL: 077-528-3963

詳しくは
こちら



トヨタ紡織滋賀の活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.1

広大な敷地に白が基調のスタイリッシュな風貌の「トヨタ紡織滋賀株式会社」。トヨタ紡織株式会社（本社：愛知県の子会社）として2006年に設立。自動車のパーツなどの樹脂製品の生産、供給している。



「トヨタ紡織滋賀株式会社」
経営管理室 人事総務グループ
グループ長 谷口 忍 氏

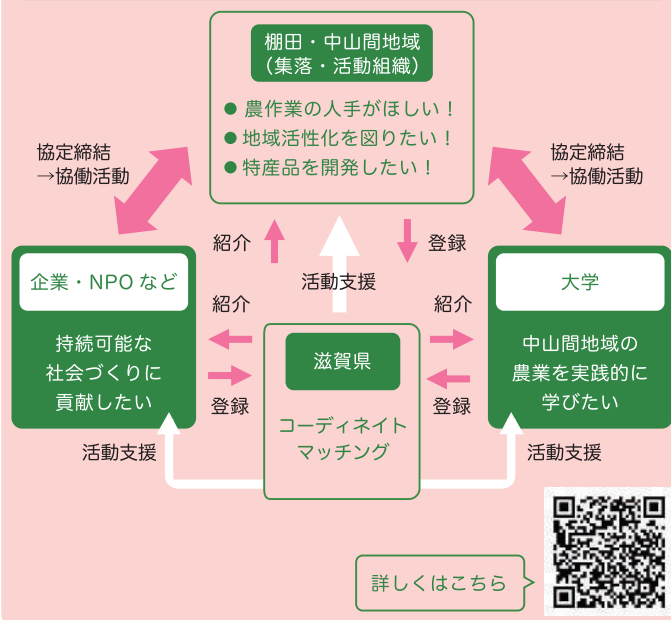
社会貢献企業のパイオニア

「企業として地域に貢献できることは何かないか」という思いをきっかけに、年間100を超えるボランティア活動を展開しているトヨタ紡織滋賀株式会社。まさに社会貢献企業のパイオニアとも言える企業文化を背景に、

トヨタ紡織滋賀さんと山女原地区が出会ったのは今から3年ほど前。取り組み当初から旗振り役をしている谷口さんにお話を聞いた。「近くの地域で貢献できることを市内で探していたら、会社から車で30分くらいのところに山女原地区をたまたま見つけました。その際に棚田の支援を募っていたことを知り、寄付を始めたのがきっかけです。」また、寄付だけでなく、年3回自主的に手を挙げた社員を数名つれ、奉仕活動にあたっている。「山女原には社員の家族が住んでいたり、隣の集落に社員が住んでいたりと、縁を深く感じています。作業の内容は簡単なもので、草刈りや、ひまわりの種まき、ミミ拾いですね。」



しがのふるさと支え合いプロジェクト

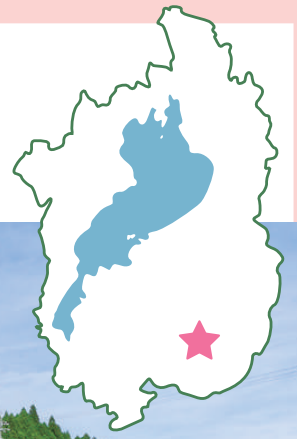


山女原との取り組みをきっかけに 更なる飛躍を

「山女原に行く、暖かく迎えてくれ、いろんな話をしてくれるんです。農村のみなさんとの交流は楽しいですね。作業は大変ですが、終わった後、普段口にできないクルミ入りのお餅やおにぎり、地元でとれた食材を振舞ってくれるんです。クルミが本当に美味しいんですよ！また、H30からはしがのふるさと支え合いプロジェクトに参加し、事業を活用してお揃いの作業用ジャンパーを購入し、よりみなさんとの一体感ができたと思います。」と笑顔で語ってくれた。さらに、参加した社員さんの社会貢献意識がアップしているという話もうかがえた。今後の目標は、地域での困りごとを吸い上げ、ボランティア活動を通じて地域に貢献すること。その意識の高まりを社員に期待しています。また、こどもたちが働きたいと思う会社に成長していきたい」と語ってくれた。

あけびはら

山女原の紹介



三重との県境、
美しい棚田が広がる山女原地区

甲賀市土山町に位置する山女原地区は、鈴鹿山脈の山裾にある地域で、三重県に繋がる東海道の裏街道が集落内を通っている。山脈を越える「安楽越」という名の道は、豊臣秀吉が5万ほどの兵をつれて通ったという歴史も。集落の周りは田んぼで、棚田に囲まれたような地形をしている。

栄えていたときは50戸あったが、現在は18戸、40人ほどの人口で、高齢化率は67・5%という中山間地域だ。地域を見渡すと電柵も多く、サル・シカ・イノシシなどの獣は日常的に現れるという。



「山女原棚田ボランティア委員会」

代表 筒井 勇雄 氏

山女原棚田ボランティア委員会が進める「和グルミの里」

山女原の棚田を守るのは、

「山女原棚田ボランティア委員会」。

平成25年に代表の筒井さんにより立ち上げられた。

山女原の棚田は、代表の筒井さんをはじめとする「山女原棚田ボランティア委員会」の皆さんによって守られている。棚田ボランティア委員会が立ち上がったのは平成25年のこと。当時農業委員をされていた筒井さんがボランティア委員会を立ち上げた。ボランティア委員会は現在6人の地域役員と、外部も含めてボランティアが25名ほど。地域住民の2/3が参加している。「立ち上げ当初は棚田を維持するための草刈りボランティアでしたが、せっかく草を刈ったのに何も植えないのもったいない」と考えた筒井さんたち委員会のメンバーと営農組合のメンバーは、委員会を立ち上げた約2年後からクルミを植え始めた。山女原には「オニグルミ」という和クルミの木が自生していて、一説によると樹齢が1000年近いと言われているそうだ。「和グルミの里」として産地化を目指しており、現在は65a(アール)ほどの棚田で栽培している。「クルミは殻が硬く、獣害対策にもいいんです。しかも、落ちるまで待って収穫するから誰でも栽培できるんですよ。」そのクルミは手伝ってくれた方へのお昼ご飯やお土産としても振る舞うようになり、今ではクルミ餅やクルミおにぎりなど、様々な食べ方のアイデアが考案されている。おすそ分けでいただいたクルミはエグ味がなく、筒井さんの人柄を思わせる優しい味だった。

ボランティアの力を借りて
更なる飛躍を

クルミだではない。ポラントニア委員会ではひまわりによる耕作放棄地の再生も行なっている。70a（アール）のひまわりは、トヨタ紡織滋賀さんと一緒に種を撒き、毎年汗を流している。その他、トヨタ紡織滋賀さんは集落内にある「カブトムシの里」の運営も手伝ってくれていて、住民と一緒に山女原の棚田保全を行なっている。集落外の力をうまく借りるのが棚田保全の秘訣と言ったところだろうか。今後はしがのふるさと支え合いプロジェクトの補助事業を活用しながら、クルミを使った商品化や、地域にあるお茶などで新しい取り組みも進めていきたい。」と話す筒井さんは楽しそうだった。



お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号
TEL：077-528-3963

詳しくは
こちら



龍谷大学農学部 食料農業システム学科の活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.4

龍谷大学の歴史は古く、1639年に西本願寺に設けられた「学寮」にはじまり、浄土真宗の精神を建学の精神として教育活動に取り組んできた。2015年には、国内外を問わず、喫緊の課題となっている「食」や「農」に関わる問題の解決をしていくため、農学部を新しく創立している。中でも、食料農業システム学科は「食」と「農」を支える地域と経済の仕組みを学ぶ学科として地域と協働した取り組みを展開してきた。

地域との繋がりを大事に

龍谷大学食料農業システム学科の淡路教授より、この地区に関わるようになった経緯を聞いた。「農学部を設立してから2年目、東近江市旧愛東町からお声がかかりました。『農村でフィールドワークできる地域を探していたところ、直売所あいとうマーガレットステーションを有する旧愛東町からのアプローチがきっかけで、活動がスタートした。普段学生さんは教室での学びがほとんどなので、実際に農村地域を体験することが少ない。だからこそ地域とつながって、そこから生まれる想いや発想を大事にしてほしいという教授の想いから現場での学びを積極的に取り入れていくそう。色々な農家や農業に触れていく中で、『幻の銘酒『百済寺樽』復活プロジェクト』という地域活動を知り、百済寺地域に関わることが多くなったそう。『同じ愛東町地区内にも関わらず、百済寺地域が位置する山手の方は傾斜地が多く、農業生産的に不利な場所であることは学生もすぐ感じたようです。特に驚いたのは、野生のサルの多さですね。大変な中でも地域をなんとかしたいという思いがみなさんと活動してみたいと思いました。』

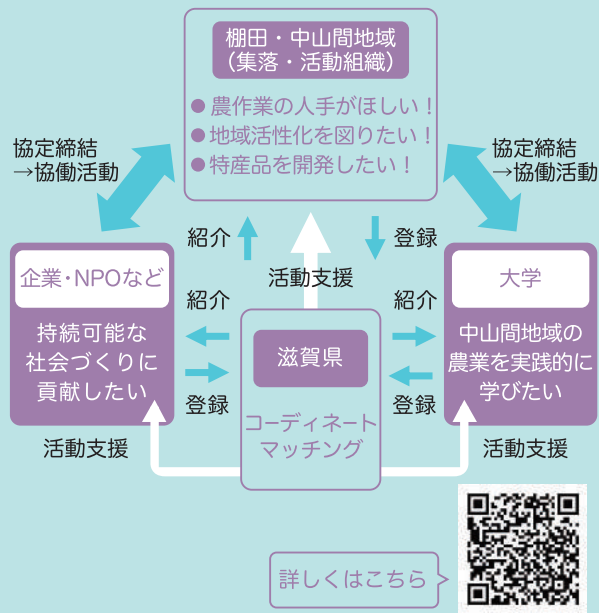
思いが形となった商品を

2018年に地域のまちづくりや特産品・サービスの販売拡大を目指して百済寺ブランド認証協議会が新たに立ち上がった。このタイミングで、しがのふるさと支え合いプロジェクトを知り、協議会と学科の間で「百済寺ブランド認証と推進」や「都市農村交流活動」に関する協定を締結することになった。地域からは百済寺にちなんだ商品開発を望まれている。「百済寺地域の歴史の重みを感じ取り、若者の斬新なアイデアをどのように融合させていくかを考えて行って欲しいと思っています。『つながりを大事にする教授や学生たちの温かさを感じられた。きつと、地域の思いや学生たちの思いが形となった商品ができていくのであろう。これからうまくっていく百済寺ブランドの商品に期待が高まった。』



「龍谷大学農学部」
食料農業システム学科
淡路 和則 氏

しがのふるさと支え合いプロジェクト





百済寺ブランド 認証協議会の紹介



百済寺ブランド認証協議会

百済寺ブランド認証協議会（東近江市）は、天台宗湖東三山の一つで紅葉や新緑の名所として有名な釈迦山百済寺と百済寺地域が共存共栄するまちづくり及び特産品・サービスの販売拡大を図るため、2018年8月に設立された。協議会には、釈迦山百済寺と百済寺地域の5集落（大萩町、上山町、百済寺本町、百済寺町、北坂町）、JA湖東、一般財団法人愛の田園振興公社などが参画している。



「百済寺ブランド認証協議会」

事務局 辰己 裕之 氏

推古14(606)年に創建された釈迦山百済寺とともに歩んできた百済寺地域は「百済寺郷」と呼ばれている。百済寺郷は寺領でもあったので日常的に寺の田畑や山林の維持管理に従事してきた。現在でも百済寺の信徒総代を選出する地域であり、寺の年中行事にも深く関わっている。長い歴史文化を有する百済寺郷は農業が盛んな地域でもあるが、近年は人口減少や農業の後継者問題が顕著になっている。ただ、集落ごとに農業生産グループの取り組みや、地域活性化の取り組みが盛んに行われており、2016年には地域おこし協力隊員が百済寺地域に2名駐在し、地域と連携して特産品づくりや農業生産などに取り組んでいる。2017年には『幻の銘酒「百済寺樽」復活プロジェクト』がはじまり、織田信長の焼き討ちにより途絶えていた僧坊酒「百済寺樽」が44年ぶりに復活した。2017年には地域の農業者を中心に百済寺酒米生産組合も発足している。清酒「百済寺樽」は、醸造元である喜多酒造をはじめ道の駅「マーガレットステーション」や地域の酒販店、紅葉シーズンの百済寺境内で販売され、いずれの店でも完売するというヒット商品になった。このように最大の地域資源である百済寺を生かした取り組みが百済寺郷全体に広がっていくようにとの思いで、地域ブランドに関する勉強会が行われており、これがブランド認証協議会の設立につながった。

ええなあ百済寺郷

ウィンウィン

寺と地域、生産者のWIN-WINをめざして設立された百済寺ブランド認証協議会の事務局はJA湖東の辰己さんが務めている。

「百済寺とともに歩んできた百済寺郷を「ええなあ」と思ってもらいたいです。地域の良い商品やサービスを多くの方に提供したい、という思いから「ええなあ百済寺郷」というブランドネームにしました。」と話していた。

百済寺ブランドの認証は、はじまったばかりで、百済寺樽に続くヒット商品ができるための支援が欠かせないという。龍谷大学との提携を機に若い皆さんの発想を生かした商品やサービスが期待されている。



お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号
TEL: 077-528-3963

詳しくは
こちら

